

「カカレバ・サレバ」の歴史的用法と変化について

著者	岡? 友子
著者別名	OKAZAKI Tomoko
雑誌名	文学論藻
巻	89
ページ	118(1)-98(21)
発行年	2015-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012941/

「カカレバ・サレバ」の歴史的用法と変化について

岡 崎 友 子

1. はじめに

これまで日本語には固有の接続詞がなく、その本格的な発達は中世以降になるとされてきた。しかし、中古（平安時代）においても文と文、段落と段落をつなぐ表現はもちろん見られ、京極・松井（1973）高橋（1985）等で指摘されるように、和文では指示詞、特に指示副詞を構成要素とした「サラバ・サリトモ・サテ」「シカレドモ」「カカルホドニ・カカレバ・カクテ」等の様々な接続表現（指示代名詞、指示副詞を含む接続表現を指示詞系接続表現と呼ぶ。^{注1}）が古代語の接続の中心となっている。

そして、これらの先行研究では、古代語の接続表現の種類、各作品における用例数といった全体的な報告はなされているが、個々の語レベルの分析—構文的な機能とその歴史的変化（接続表現から感動詞へ）、指示詞の指示機能の形式化等—については、「カクテ・サテ」（岡崎2011）を除き、管見の限り、見出すことができない。

そこで、筆者は指示詞系接続表現の全容を明らかにすることを最終目標とし、「カクテ・サテ」の次の段階として、比較的例数があり、中古から近世まで歴史を通じて見られる指示詞系接続表現の「カカレバ・サレバ」（^{注2}）（指示副詞カク・サ系列「カク・サ」＋動詞「アリ」、古代語の指示詞の系列名については2. 3節で示す）について、構文的な機能と変化、さらに指示詞の指示機能の形式化について調査、分析した結果を述べていく。

2. 先行研究

先行研究について、2. 1節中古の接続表現を広く扱ったもの、2. 2節「サレバ」の用法に関するもの（「カカレバ」は見られない）、2. 3

節指示詞の種類と指示用法に関するものについてまとめておく。

2. 1 中古の接続表現を広く扱ったもの：京極・松井（1973）・高橋（1985）

古代語の接続詞（本稿では接続表現、原文に従う。以降も同様）を概説的に扱った京極・松井（1973）では、古代語の接続詞を（1）のように分類する（それぞれの例については省略した）。

（1）A 複合接続詞

（a）指示語を構成要素とするもの

- ①「か」系 ○「かく」類 ○「かかり」類 ○「かり」類
- ②「こ」系 ○「ここ」類 ○「これ」類
- ③「さ」系 ○「さ」類 ○「さり」類
- ④「しか」系 ○「しか」類 ○「しかり」類
- ⑤「そ」系 ○「そ」類 ○「それ」類

（b）その他の語を構成要素とするもの

- ①動詞系 ②名詞系 ③副詞系

B 転成接続詞

C 借用接続詞

上記について京極・松井（1973）は、（イ）A（a）①「か」系（「かり」類除く）・③「さ」系は和文に用いられて訓読文に用いられない、（ロ）A（a）②「こ」系・④「しか」系・①「か」系「かり」類は訓読文に用いられて和文に用いられない、（ハ）A（b）およびB転成・C借用接続詞はほとんどが訓読文に用いられる、（ニ）A（a）⑤「そ」系は語により異なるが訓読文に用いられる傾向が強いという文体的な傾向を指摘する。

なお、本稿の考察対象である「カカレバ・サレバ」はA（a）①「か」系と③「さ」系であり、和文に用いられる接続詞に分類されている。

次に中古和文の接続詞を広く調査し、具体的な数値を提示する高橋（1985）は、接続詞の語構成において最も多いのは「指示語等（+助詞）」

であり、構成語は60語のうち51語までもが指示語系のもので占められていること、またそれらは「さ」系と「か」系（本稿の指示副詞サ系列とカク系列）が中心であり、この両者は通時的にみて中古の間に「か」系が衰退し「さ」系に凝集するという傾向があることを指摘している。

この高橋（1985）は多くの作品を調査した労作ではあるが、1）個々の接続表現の用法に触れていない、2）「さ」系と「か」系の用法と歴史的变化を直示用法の領域（近称・中称）から説明している、3）調査が中古のみであり作品のジャンルに偏りがある、といった問題を残している。

2. 2 「サレバ」の用法に関するもの：半藤（1992）・徳永（2007）・小林（1996）

半藤（1992）徳永（2007）は「サレバコソ」「サレバヨ」の感動詞的用法の論考であり、これについては本稿と深く関係するため4章で後述する。

次に小林（1996:47-48）は「然レバ」^{（注3）}について、「然ラバ」と「然レバ」は「一応、仮定条件と確定条件という、対立したもの」としてとらえられるけれども、両者ともに、接続詞として用いられるほか、感動詞にも転じて用いられているように、（中略）したがって、通常の条件表現とはやや性格の異なるものとして扱わなければならないであろう」と述べている。

本稿は条件表現の分析を主としないため、已然形+「バ」の表す偶然確定・必然確定、そして仮定条件への変化等を詳しく考察することはしないが、本稿の分類であるタイプB（4章で示す）の「サレバ」は、この条件表現として働くものが主であり、適宜参照していく。

2. 3 指示詞の種類と指示用法に関するもの：岡崎（2010）

指示詞系接続表現の考察にあたり、指示詞の歴史と用法を確認しておく（岡崎2010）。表1に中古の指示詞をまとめる^{（注4）}。

まず、カク系列「カカリ」（2）は上代から見いだせるが接続表現はなく、またサ系列は「サ」そのものが上代には見られない（この時期のサ

表 1 中古語の指示詞

系列	指示代名詞	系列	指示副詞
コ	コノ・コレ・ココ	カク	カク（カウ）・カカリ・カヤウニ・カバカリ等
ソ	ソノ・ソレ・ソコ		
カ (ア)	カノ・カレ・カシコ (アノ・アレ・アシコ)	サ	サ（シカ）・サリ・サヤウニ・サバカリ等

系列は「シカ」(3))。サ系列に「サ(サリ)」が現れるのは中古である。これにより、本稿は中古からの論考となる。

(2) 黒髪に 白髪交り 老ゆるまで かかる恋には[如是有恋庭]
いまだあはなくに(万葉集、563)

(3) 梅の花 散らくはいづく しかすがに[志可須我尔] この城の
山に 雪は降りつつ(万葉集、823)

次に指示用法について中古では、Kの系列(コ・カ・カク系列)が、今、現在、目に見える、感覚できる対象を指示し、Sの系列(ソ・サ系列)が、今、現在、目に見えない、感覚できない対象を指示していた。これを現代語の指示用法にあてはめると、ソ・サ系列は照応・観念用法、コ・カ・カク系列は直示用法をもっていたことになる(また、コ・カク系列はすでに中古で派生的に照応用法をもつ)。以下に現代語の指示用法をまとめておく(岡崎2010)。なお、現代語ではコ・ソ系が直示・照応用法、ア系が直示・観念用法をもつ。

【直示用法】今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの。例：(目の前の塩を指差し)「それ、取って！」

【照応用法】対話により音声化、または書記化された言語文脈内に、当該の指示表現と指示対象を共有する先行詞があるもの。例：昨日、車を買った。その車は、とても高かった。

【観念用法】言語テキスト内に先行詞もなく、今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象もないもの(過去の直接経験に関わる要素を

指示対象とする)。例:(独り言) 昨日のあのベルギービール、美味しかったなあ。

ところで、この指示用法のうち主に接続表現に関わるのは照応用法であり、カク系列もサ系列も照応用法をもつため、当然、接続表現になりうる。

また、古代語のSの系列(ソ・サ系列)は上記で述べるように、今、現在、目に見えない、感覚できない対象を指示するが、これは具体的には過去の直接経験に関わる要素(観念用法(4))や先行する言語的文脈内の先行詞(照応用法)、さらに記憶内の過去・現在に関わる概念的な要素(記憶指示用法^(注5)(5))を指示対象とする。

(4) 玉の枝も返しつ。竹取の翁、さばかり語らひつるが、さすがに覚えて眠りをり。(竹取物語、40頁)(あれほど語り合ったのに)

(5) 「などかさもあらむ。この家にさる筋の人出でものしたまはでやむやうあらじと故大臣の思ひたまひて」(源氏物語、少女、36頁)(当家からそうした筋の人(=後に立つような人)がお出にならずじまいになるわけはあるまいと)

現代語では(4)のような過去の直接経験に関わる要素はア系の指示であるが、(5)の記憶内の(直接経験の無い)概念的な要素を対象とする指示は、現代語でもソ系(サ系列「サ」は「サウ→ソウ」となりソ系に吸収される)の指示である。

このようなソ系の指示に対し、堤・岡崎(2014)は「記憶指示用法」とし(6a)はあるコミュニティで共通に連想されるもの、(6b)は現場の状況から一般的に導き出されるもの、(6c)は漠然とした概念的な要素であり、(6)はすべて話者が発話時以前から記憶内に有していた対象を参照する指示であると指摘されている。

(6) a あの人、そっち系／その筋の人なんだって。

b (町でばったり男女の友人に出会い)

ははーん、2人はそういう関係か。

c (スーパーからの帰宅途中、独り言)

そうだ！しまった！（思い出し）（堤・岡崎（2014）より）

ここで注意しておきたいのは、(6 a b) は現場の対象（a「(遠方にいる) あの人」、b「男女の友人」と、さらに記憶内の概念的な要素の二つを同時に指示している二重指示であるということである。この二重指示は現代語だけでなく古代語にも見られ、コ・ア系（列）にはないソ系（列）（・サ系列）の特徴であると考えられる（堤・岡崎（2014）「ソ系（列）指示詞の二重指示性」）。

この記憶指示用法（二重指示）は、中古の「サレバ」が接続表現以外として機能するタイプEに深く関与すると考えられ、これについては4.5節で例を示しながら論じていく。

3. 分析方法

1章で述べたように、筆者は指示詞系接続表現の全容を明らかにすることを目標とするため、岡崎（2011）の分類を、すべての指示詞系接続表現に適応できるように（7）に修正する。

(7)

(Xは先行する言語的文脈、または現場・記憶内、Yは言語的文脈)

タイプA：指示詞の指示機能は働いている。X内の事態を指示対象とし、Yの接続表現以外の文の構成要素となる。

タイプB：指示詞の指示機能は働いている。X内の事態を指示対象とし、Yにおいて接続表現として働く。^(注6)

タイプC：指示詞の指示機能は形式化している。Yにおいて接続表現として働く（先行する言語文脈有り）。

タイプD：指示詞の指示機能は形式化している。Yにおいて接続表現として働く（先行する言語文脈無し）。

タイプE：指示詞の指示機能は形式化している。Yの接続表現以外の文の構成要素（もしくは文）となる。

次に（７）の分類の根幹とでも言うべき「指示詞の指示機能は（働いている・形式化している）」について、岡崎（2011）では詳しく述べられていないため、現代語の例を用いながら説明しておく。

（８）Ａ「田中さんは、佐藤さんに恋しているらしい」

Ｂ「それで、最近、佐藤さんばかりを見ているんだね」

→「田中さんは、佐藤さんに恋している（の）」で、佐藤さんばかりを見ているんだね。

（９）Ａ 夫「今年のお正月は忙しいなあ。遊びに行っている暇ないなあ」
Ｂ 妻「それで、何が言いたいのか？」

→??「今年のお正月は忙しいなあ。遊びに行っている暇がない（の）」で、何が言いたいのか？

上記に示すように（８）「それで」はＡの発言を受けている。それに対し、（９）「それで」はＡの発言は受けていない。

この「それで」といった指示詞系接続表現について、益岡・田窪（1992: 57）は「また、指示詞を含むものは、「そ～」の部分で前の文を受けている（代用している）と考えられる。つまり、これらの文は、前の文を省略、代用という形で含んだ複文と見ることもできる」と述べている。

（10）花子は太郎に電話した。それから、会いに行った。

（＝花子は太郎に電話をしてから、会いに行った）

（益岡・田窪1992）

（８）「それで」は（10）「それから」と同じく前の文を受け（代用しているが）、（９）「それで」はそのような働きをしていない。つまり（８）「それで」は指示行為（照応）をおこなっているが、（９）「それで」は指示行為（照応）をおこなっていない。

そこで、本稿では（８）「それで」のような指示行為をおこなっている接続表現を「指示詞の指示機能は働いている」とし、それに対し指示行為をおこなっていない（９）「それで」を「指示詞の指示機能は形式化し

ている」とする。

4. 「カカレバ・サレバ」の分類について

中古を中心に「カカレバ・サレバ」を分類した結果を示していく。

4. 1 タイプAについて

タイプAは、X内の事態を指示対象とし（指示用法としては、「カカレバ」は直示・照応用法、「サレバ」は照応用法）、Yにおいて節の述語として働く。

(11) またとなく思う方のことのかかれば、つらく心憂くて、をさをさ
見入れず。(源氏物語、東屋、79頁、照応用法)

(12) 声にめづる心こそ背きがたきこそにはべりけれ。さかしう聖だつ
迦葉も、さればや、起ちて舞ひはばりけむ」など聞こえて
(源氏物語、椎本、181頁、照応用法)

タイプAは中古のみに見いだせるものであり、中世になると見られなくなる。以下に中古の各作品におけるタイプAをまとめておく。

表2 中古のタイプA

カカレバ	竹取	古今	土左	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
直示用法	0	0	0	0	0	2	0	0	3	0	5
照応用法	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
計	0	0	0	0	0	2	0	0	5	0	7
サレバ	竹取	古今	土左	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
照応用法	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2

一
二

4. 2 タイプBについて

タイプBはX内の事態を指示対象とし（指示用法としては、「カカレバ」は直示・照応用法、「サレバ」は照応用法）、Yにおいて接続表現として働く。なお、中古の「カカレバ・サレバ」には、XとYの事態が偶然確定条件および必然確定条件関係であるものが見られる（小林1996）。

表3 中古のタイプB

カカレバ	竹取	古今	土左	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
直示用法	0	0	1	0	0	4	0	0	1	0	6
照応用法	2	0	0	1	3	1	0	0	4	0	11
計	2	0	1	1	3	5	0	0	5	0	17
サレバ	竹取	古今	土左	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
照応用法	1	0	1	3	4	6	0	3	6	0	24

○偶然確定条件：「カカレバ・サレバ」が指示するX内の事態が、Yの事態の成立するきっかけ、または認識する前提であるもの。

- (13) そのかみ、生田川のつらに、女、平張をうちてゐにけり。かかれ
ば、そのよばひ人どもを呼びにやりて

(大和物語、369頁、照応用法)

- (14) 「眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちは
めつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなり
ぬれば (土左日記、47頁、照応用法)

○必然確定条件：「カカレバ・サレバ」が指示するXの事態が原因・理由を表し、XとYの事態とが必然的な因果関係で結びつくもの。

- (15) 「我死なば、代わりには、男子にもまれ、女子にもまれ、君につ
かうまつれ」といとさかしう言ひいます。かかれば、北の方、
〈憎し、とく死ねかし〉と思ふ。(落窪物語、281頁、直示用法)

- (16) 何ごとにも、女はもてあそびの妻にしつべくものはかなきものか
ら、人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば、罪の深き
にやあらん。(源氏物語、椎本、180頁、照応用法)

その他「サレバトテ」で、Xの事態の内容を踏まえ、Yで否定を表明するものが見られ、同様の用法は中世でも見いだせる（中古は以下1例のみ）。

- (17) a あやしからむ女だにいみじう聞くめるものを。さればとて、はじめつ方ばかり、ありきする人はなかりき。(枕草子、75頁)
b 「是こそ以ての外の御大事で候へ。さればとて十善帝王にむかひ参らせて、争でか御合戦候べき」(平家物語、2、143頁)

さらに「サレバ」には、Xの事態が直前の一文だけでなく、先行する複数の文であるものが見られる。この用法は中古では2例しか見られないが、中世の『宇治拾遺物語』等でまとまって見いだせる。

- (18) 鶯、鳥などのうへは見入れ聞きいれなどする人、世になしかし。
されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬことするなり。(枕草子、94頁、照応用法)

4. 3 タイプCについて

タイプCは、Xの事態を指示しておらず（指示詞の指示機能は形式化している）、Yにおいて接続表現として働くものであり、中古で「サレバ」に1例（「カカレバ」には見られない。なお、(19)「サレバ」は「どの娘も同じ自分の子なのだから、いくらなんでもこうまで放っておおきになるまいと思っていたのに。もともと、世の中に母のない子もないわけではない」といった補足的な内容を付加する形で用いられている）のみ見られる。このタイプCは、後述するが中世になるとまとまって見られるようになる。

- (19) 「人の御心は見知りをはてぬ。ただ同じ子なれば、さりともしとかくは思ひ放ちたまはじとこそ思ひつれ。されば、世に母なき子はなくやはある」(源氏物語、東屋、38頁)

4. 4 タイプDについて

タイプDは、Xの事態を指示しておらず（指示詞の指示機能は形式化している）、Yにおいて接続表現として働くものである。なお、このタイプDはタイプCと違い、先行する言語文脈が無い。

このタイプDは中古では見いだせず、見られるようになるのは中世以降の「サレバ」である（「カカレバ」には見られない）。以下に中世の例を参考としてあげておく。

- (20) 二条大宮へ仕りて、尋ぬる程に、門を閉ぢて、叩けど叩けども、音もせず。「されば、左京大夫が許へ」と（保元物語、315頁）

4. 5 タイプEについて

タイプEは、指示詞の指示機能は形式化しており、Yの接続表現以外の文の構成要素（もしくは文）となるものである。

まず、「カカレバ」にはタイプC・Dと同じく、タイプEも見られない。「サレバ」に関しては、中古において「サレバヨ」「サレバコソ」といった「サレバ」＋助詞がこのタイプEであると考えられる。

この「サレバコソ」「サレバヨ」は半藤（1992）徳永（2007）において感動詞的な慣用句用法であり、「思った通りだ」「案の定だ」等の意に用いられていること、さらに、この用法は「サレバ」の接続用法から成立したものであると指摘されている。

しかし本稿では、この「サレバコソ」「サレバヨ」の感動詞的用法は「サレバ」の接続用法から成立したものではなく、ソ・サ系列の記憶指示用法が深く関与していると考え（^{注7}）。なお、接続用法から成立する「サレバ」の感動詞的用法（タイプE）は別の用法として中世以降に見られるようになる。これについては次章で述べる。

そこで、中古の「サレバヨ」「サレバコソ」の成立に関わる記憶指示用法（堤・岡崎2014）について、再度、説明を加えながら考察していく。

まず、(21)について例えば、あるコミュニティでは薬指に赤いマニキュアを塗っていることが、婚約していることの証であるとする。このコミュニティに属している人は、記憶内の情報を元に、

- (21) (指を見て) え？純ちゃん、そういうこと？（堤・岡崎2014）

と言える。

ところが、この文は隣にいる、このコミュニティに属さない人物には理解されない。つまりこのソ系「ソウイウ」は、眼前の対象「(純ちゃん)の指」を指示するだけでなく、記憶内にある(そのコミュニティ内の共通の)知識を参照した指示であり、先の2. 3節で述べた、現場の対象と記憶内の知識・情報の両方を指示した二重指示である。

そして、「やはり、そうだ」と現代語訳される中古の「サレバヨ」「サレバコソ」も同様の指示であり、(22)「サレバコソ」は(燃える火鼠の皮衣を見て)眼前の燃える様子と記憶内の概念的な要素を指示する二重指示(直示・記憶用法)、(23)「サレバヨ」は相手(薫)の発言と記憶内の概念的な要素を指示する二重指示(照応・記憶用法)である。

(22) 火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。「さればこそ、異物の皮なりけり」といふ。(竹取物語、41頁)

(23) (薫の説明をうけて)僧都、「さればよ、ただ人と見えざりし人のさまぞかし」(源氏物語、夢浮橋、375頁)

この感動詞的な「サレバヨ」「サレバコソ」は、中古では「サレバヨ」の方が多く見いだせるが、中世以降は「サレバコソ」の方がまとまって見られるようになる。

そこで、表4に調査範囲内すべての「サレバヨ」「サレバコソ」の用例数をまとめる。

表4に示すように、「サレバヨ」は中古の間に多用されることにより定型化し、もともと記憶指示用法(「やはりそうだ」)であったものが、「案の定だ」「予想通りだ」等の慣用的な意味となり衰退したことが予想される。

なお、「サレバコソ」に関しては、中古の早い時期に例が見られるものの、中古を通して多くはなく、中世に増加することから、別の道筋(慣用表現化、衰退)を考える必要がある。

表4 タイプE 「サレバヨ」「サレバコソ」

中古	竹取	古今	土佐	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
サレバヨ	0	0	0	1	0	6	2	2	36	0	47
サレバコソ	1	0	0	0	0	2	0	1	4	0	8

中世以降	方丈	宇治	保元	平治	平家	徒然	天草	虎明	近松	計
サレバヨ	0	4	0	(2)	0	0	0	0	0	4
サレバコソ	0	11	0	2	11	0	10	58	2	94

※近松で1例「サレバコソサレバコソ」であり、1とカウントした。平治は2例「サレバヨ」ではなく「サレバトヨ」のため()を付した。

この助詞を後接した「サレバヨ」「サレバコソ」の感動詞化については、同様の現象が「サテ」にも見られる。岡崎(2008)で、「サテ」(助詞を後接しない)に感動詞的用法が見られるのは中世末(『天草版平家物語』)以降であるが、助詞を後接した「サテ」+助詞「モ」(24)には、中古で既に感動詞的用法が見られることが指摘されている。

(24) よろづのことに、などかはさても、とおぼゆるをりから、時々思ひ分かぬばかりの心にては、(源氏物語、帚木、90頁)

この「サテ」+助詞の感動詞的用法に関しても、「サレバヨ」「サレバコソ」と同じく記憶指示用法に関わっているのかどうかについて考察する必要があるが、これについては別稿で論じることとし、本稿は指示詞系接続表現の歴史的変化には複数の流れが起こる場合があることを指摘するのみとしておきたい。

4. 6 まとめ

中古の分類を表5・表6に示す。まず中古の「カカレバ」は、表5に示すように(『古今和歌集』を除き)『和泉式部日記』『枕草子』『紫式部日記』といった日記・随筆類ではまったく見られない。

表5 中古の「カカレバ」

カカレバ	竹取	古今	土左	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
A	0	0	0	0	0	2	0	0	5	0	7
B	2	0	1	1	3	5	0	0	5	0	17
C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	2	0	1	1	3	7	0	0	10	0	24

表6 中古の「サレバ」

サレバ	竹取	古今	土左	伊勢	大和	落窪	和泉	枕	源氏	紫式	計
A	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
B	1	0	1	3	4	6	0	3	6	0	24
C	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E	1	0	0	1	0	8	2	3	40	0	55
計	2	0	1	4	4	14	2	6	49	0	82

これについて、日記・随筆類は個人の心内の言語的なテキストで構成されるものであり、現場性は低い。それに対し、『源氏物語』等の物語には人物の行動、場面描写等の現場性があるテキストが存在する。

そして、2. 3節で述べたようにカク系列は直示性が高いことから、「カカレバ」は現場性のない日記・随筆類に現れにくく、現場性のある物語『源氏物語』等には見られるのではないかと予想される。

最後に、中古の「サレバ」は表6に示すように、接続表現であるタイプB・C（Dは無し）は全82例中25例（約30%）と全用例数に対しそれほど多くはない。これについては次章で述べるが、「サレバ」の接続表現の全盛は中世前期であると考えられる。

5. 中世以降の「カカレバ・サレバ」について

中世に入ると「カカレバ・サレバ」ともタイプAは見られなくなる。また、「カカレバ」については、現在の調査範囲において、『宇治拾遺物語』（タイプBが4例のみ）以降、例がまったく見いだせなくなる。

5. 1 中世以降のタイプB

中世以降のタイプBを表7にまとめる。まず、「カカレバ」は『宇治拾遺物語』の4例（照応用法のみ）であり、すべて「サレバ」と同様の場面（最後の1文で、説話の結び）で用いられている。

表7 中世以降のタイプB

カカレバ	方丈	宇治	保元	平治	平家	徒然	天草	虎明	近松	計
直示用法	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
照応用法	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
計	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
サレバ	方丈	宇治	保元	平治	平家	徒然	天草 ^{（まき）}	虎明	近松	計
照応用法	1	40	21	4	76	18	13	0	4	177

- (25) 甲斐といふ人のこの明衡の妹の男なりけり。思ひかけぬ指貫のくくりの徳に、希有の命をこそ生きたりければ、かかれば、人は忍ぶといひながら、あやしの所には立ち寄るまじきなり。

（宇治拾遺物語、94頁）

- (26) 「水飯を役と召すとも、この定に召さば、さらに御太り直るべきにもあらず」とて、逃げに往にけり。さればいよいよ相撲などのやうにてぞおはしける。（宇治拾遺物語、233頁）

次に「サレバ」は表7に示すように、タイプBは中世前期（『方丈記』から『平家物語』）に多く見られるようになり、『大蔵虎明本狂言集』には例が見られなくなる。このことから、タイプBは中世前期が全盛期であり、中世後期以降、漸次衰退していったものと予想される。

なお、タイプBの用法については中古から大きな変化はない（偶然確定条件（27）、必然確定条件（28））。

- (27) 「阿波の内侍と申しし者にてさぶらふなり。（中略）」とて、袖をかほにおしあてて、しのびあへぬ様、目もあてられず。法皇も、「されば汝は、阿波の内侍にこそあんなれ」

(平家物語、2、513頁)

- (28) 童の申すやう、「日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふ」と

(宇治拾遺物語、382頁)

5. 2 中世以降のタイプC・D・E

中世以降の各作品におけるタイプC・D・Eの用例数については、5.3節まとめの表8・表9に示す。

まず、タイプCは中世前期(『宇治拾遺物語』～『平家物語』)で16例、中世末期から近世前期(『天草版平家物語』～『近松門左衛門集』)で17例と中世でまとまって見られるようになり、またタイプDも中世前期で2例(『保元物語』『平家物語』)、中世後期から近世前期(『徒然草』～『近松門左衛門集』)で7例と増加していく(早い例は『保元物語』の(20))。

- (29) (タイプC) 父のようて死に候ひけるは、わが身の冥加と覚え候。

随分同隸共にも芳心せられてこそまかり過ぎ候ひしか。されば御臨終の御時も、此世の事をばおぼしめし捨てて

(平家物語、2、305頁)

- (30) (タイプD) 「その理は牛の主に限るべからず」と言ふ。又言はく、「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし」

(徒然草、155頁)

次に、タイプEについて、「サレバヨ」「サレバコソ」は表9の()内に用例数を示したように中古と同じく用いられる。さらに、中世前期には「コハサレバ」「サレバコハ」という定型化した別の感動詞的用法が新しく見られるようになる(「これは一体全体」等の意)。

- (31) 行隆手の舞ひ足の踏みどころも覚えず。是はされば夢かや夢かとぞ驚かれける。(平家物語、1、252頁)

- (32) 鎌倉へだにも入れられぬこそ本意なけれ。さればこは何事ぞ。

また、中世末期（『天草版平家物語』）以降には、相手の言葉を受け「いかにも」「そうそう」「ですが」等といった応答を表すもの（「サレバイノ（サレバイナ）」「サレバサレバ」「サレバトヨ」「サレバノ事」等）が主流となっていく。

なお、中古から中世末期までのタイプEには、聞き手を指向したものは非常に僅かしか見られないことから中世後期以降に、（聞き手を指向した）応答詞的な性格を帯びるようになったと予想される。なお、(33)(36)は中世の最も早い例である。

(33) 「今まで御命ののびさせ給ひて候こそ、不思議には覚え候へ」と申せば、「さればこそ。去年少将や判官入道に捨てられて後のたよりなさ、心の中をばただおしはかるべし。」（平家物語、1、219頁）

(34) (夫) されば、重々そなたのが道理じや
（虎明本狂言、中、239頁）

(35) 二人の娘うち笑ひ、さればいの。今日も一日芝居見て、それからこゝの川口の。（近松門左衛門集、1、17頁）

また、中世では1例(36)のみ、さらに中世末期以降には(37)(38)に示すように（助詞を後接しない、定型句でない）「サレバ」のみの感動詞的用法がまとまって見いだせるようになる。この用法が接続詞的用法（タイプB・C・D）から派生した感動詞的用法であると考えられる。

(36) 守殿、物より帰りて、「など人々参物は遅き」とてむつかる。「されば、この羊を調じ侍りてよそはんとするに（後略）」
（宇治拾遺物語、411頁）

(37) (孫二) やれようこそおじやつたれ、此間はお目にかゝらなんだ
(孫一) されば此間はおめにかゝらなんだ
（大蔵虎明本狂言集、上、106頁）

- (38) さてかの倅は無事で里にゐることか。何としたぞと言ひければ。
されば、その子を里にやりしと申しせしは偽り。
 (近松門左衛門集、1、412頁)

5. 3 まとめ

表8・表9に中世以降の「カカレバ・サレバ」の分類を示す。

表8 中世以降の「カカレバ」

カカレバ	方丈	宇治	保元	平治	平家	徒然	天草	虎明	近松	計
A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4

表9 中世以降の「サレバ」

サレバ	方丈	宇治	保元	平治	平家	徒然	天草	虎明	近松	計
A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B	1	40	21	4	76	18	13	0	3	176
C	0	1	5	0	10	0	4	11	2	33
D	0	0	1	0	1	1	2	2	2	9
E	0	1 (15)	0	0 (4)	10 (11)	0	5 (10)	33 (58)	31 (2)	80 (100)
計	1	57	27	8	108	19	34	104	40	398

※Eの()は「サレバヨ(サレバトヨ)・サレバコソ」。虎明1例のみ不明(後続の文が無いため)。近松「さればこそさればこそ」は1とカウントした。

一〇一

「サレバ」のタイプB・C・Dの接続表現について、中古では全82例中25例(約30%)、中世前期(『方丈記』から『平家物語』)には全201例中160例(約79%)、中世後期以降(『徒然草』以降)は全197例中58例(約29%)であり、「サレバ」の接続表現(特にB)に最も勢力があった時期は中世前期である。

なお、タイプC・Dに関しては、中古で1例のみだが、中世以降、タイプC33例、タイプD9例と増加する。

そして、タイプEについては、「サレバ」のみの用法は、中世前期には『宇治拾遺物語』1例であったものが、中世末期以降には『天草版平家物語』2例、『大蔵虎明本狂言集』32例（1例「さればされば」、合わせると33例）、『近松門左衛門集』10例（「ア・サレバ」等4例含む）と増加する。

以上より、中世末期から近世において「サレバ」そのものが、感動詞的な性質へと傾いていったものと予想される^(注9)。

6. さいごに

これまで中古・中世を中心に「カカレバ・サレバ」の歴史的用法・変化について考察をおこなってきた。

まず、「カカレバ」の中古の資料による出現頻度の偏りは指示用法（現場性）によるものである可能性を述べたが、中世以降の衰退については同様であるとは考えられない。これについてはさらなる調査が必要である。

また、「サレバ」は中古には助詞を後接した「サレバヨ」「サレバコソ」にタイプEを見出すことができるが、これについてはこれまで述べてきたように、接続表現からの派生ではない。

「サレバ」のいわば直線的な歴史的変化を考えるならば、接続表現であるタイプB・Cの中古における発生、そして中世前期のタイプBの隆盛とタイプC・Dの増加、また中世以降の（接続表現から派生した「サレバ」のみの）タイプEの発生と勢力拡大による、接続表現（特にタイプB）の衰退という流れが見えてくる。これは、「サテ」（岡崎2011）と同じくA→B→C・D→Eという歴史的変化であったと捉えてよいのではないだろうか。

以上、本稿では「カカレバ・サレバ」について考察をおこなってきたが、これらの歴史的変化を見る場合、特に中世から近世にかけては、小林（1996）等が指摘する接続表現のサ系列からソ系への変化も視野に入れる必要がある。まだまだ残された課題は多い。

注

- ¹ 筆者はこれまで指示詞系接続語としてきたが、今後、様々な複合的表現を含むため「指示詞系接続表現」と修正する。
- ² 「サラバ」も例数があり歴史を通じて見られるが、「カカラバ」が中古の調査範囲では見いだせないため、カク・サ系列の両系見られる「カカレバ・サレバ」を対象とした。
- ³ 『今昔物語集』等の考察部分であるため「然レバ」と記述されているが、他の個所には「サレバ」とあり、「サレバ」と考えておく。
- ⁴ 現代語の指示詞は、コ系「コノ・コレ・ココ・コウ」等・ソ系「ソノ・ソレ・ソコ・ソウ」等・ア系「アノ・アレ・アソコ・アア」等と、指示代名詞・指示副詞ともコ・ソ・ア3系にまとめることができる。
- ⁵ これは岡崎（2010）の曖昧指示表現、否定対極表現、感動詞にあたる用法であり、これらの用法については堤・岡崎（2014）で「ソ系（列）の記憶指示用法」と修正をおこなった。
- ⁶ タイプBのXが現場の場合、一見するとタイプDと同様に見えるが、タイプBの場合には明らかに現場に指示対象がある（古典資料の場合、言語化される場合も多い）。
- ⁷ ただし「サレバコソ」にはタイプA・B（各1例）と考えられる例がある。例「今より後は、さればこそ、もてなしたまはむまにあらむ」（源氏物語、総角、238頁）なお、中世でも見いだせる。
- ⁸ 『天草版平家物語』に1例のみ、直示用法とも考えられる例がある。例「滝口これを見て、「いかに汝はされば御遺言をば違へ奉るぞ」（319頁）。なお原拠本も「是ヲ見テ・如何ニ汝ハ・サレハ・御遺言ヲハ違へ奉ルソ」（『百二十句本平家物語』斯道文庫古典叢刊2汲古書院、617頁）とある。
- ⁹ 『ロドリゲス日本大文典』（土井忠生訳、三省堂）に「サレバ」は、「第三巻 本巻では日本の文章を書くのに用ゐられる文体とこの国語の色々な数へ方とに就いて述べる」「内典'（NAIDEN）の文体に就いて」で「又、文首にはSore（夫）、Somo somo（そもそも）、Xicareba（然れば）、Xicaruni（然るに）、Sareba（されば）、（以下省略）」とあり、当時、接続表現として日常の話し言葉ではないと認識されていた可能性がある。

参考文献

- 岡崎友子（2008）「指示語「サテ」の歴史的用法と変化について—『源氏物語』を中心に—」『国語語彙史の研究』二十七、pp.183-202、国語語彙史研究会、和泉書院
- 岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的的研究』ひつじ書房
- 岡崎友子（2011）「指示詞系接続語の歴史的変化—中古の「カクテ・サテ」を中心に—」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編、pp.67-87、くろしお出版

版

- 岡崎友子 (2013)「中古における接続語の使用傾向について」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』(国立国語研究所)、pp.167-176
- 京極興一・松井栄一 (1973)「接続詞の変遷」『品詞別日本語文法講座 6 接続詞・感動詞』鈴木一彦・林巨樹編、pp.90-135、明治書院
- 小林賢次 (1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 高橋尚子 (1985)「中古語接続詞の機能と変遷—物語文学作品を資料にして—」『愛文』21、pp.8-17
- 堤良一・岡崎友子 (2014)「ソ系(列)指示詞の記憶指示用法について」『日本語学会2014年春季大会発表予稿集』、pp.119-126
- 徳永辰道 (2007)「「さればこそ」の二種の用法—主体の感動を表出する用法の成立—」『ことばの論文集—安達隆一先生古稀記念論文集—』おうふう、pp.220-232
- 半藤英明 (1992)「古典に於ける慣用句的「こそ」の働き」『國學院雑誌』第93巻11号、pp.22-29
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

調査資料

中古の用例調査は、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」(中納言)を使用した。表の資料名は次の下線部のみを記載した。『万葉集1～4』(小学館日本古典文学全集)、『土佐日記(土左日記) 蜻蛉日記』『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』『古今和歌集』『落窪物語 堤中納言物語』『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』『枕草子』『源氏物語1～6』『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』『宇治拾遺物語』『将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』『平家物語1・2』『近松門左衛門集1・2』(以上すべて小学館新編日本古典文学全集)、江口正弘注釈『天草版平家物語全注釈』新典社(本文では『天草版平家物語』)、池田廣司・北原保雄著『大藏虎明本狂言集の研究 本文編上・中・下』表現社(本文では『大藏虎明本狂言集』)